

寺泊御書てらひまうじしよ

今月 十月也 十日、相州愛京郡依智えちの郷を起つて、武蔵の国久目河くめがわの宿に付き、十二日を経て越後の国寺泊の津に付きぬ。ここより大海を亘わたりて佐渡の国に至らんと欲す。順風定まらず、その期を知らず。道の間の事、心も及ぶことなく、また筆にも及ばず。ただ暗おに推おし度はかるべし。また本より存知の上なれば、始て歎くべきにあらずと、これを止とどむ。法華經第四に云く、しかもこの經は如来の現在すらなおんしつお怨おんしつ嫉多しいわんや滅度の後をや。第五の巻に云く、一切世間怨あだ多くして信じがたし。涅槃經三十八に云く、その時一切の外道の衆ことごとくこの言を作さく、大王 今はただ一りの大悪人有り瞿曇沙門くどんしゃもんなり。一切世間の悪人、利養のための故にそのもとに往き集りて眷属けんぞくとなりて善を修することあたわず。呪術力の故に迦葉かしようおよび舍利弗しやりほつ・目犍連もっけんれん等を調じよぶ伏す。この涅槃經の文は、一切の外道がわが本師たる二天・三仙の所説の經典を仏陀やぶに毀られて出すところの悪言

なり。法華經の文は仏を怨となすにはあらず。經文天台の意に云く、一切の声聞・緣覺ならびに近こんじよう成ねがを樂ねがう菩薩等云云。聞かんとほつせず、信ぜんとほつせず、その機に當らざるは言を出して謗ることなきも、皆怨おんしつ嫉おんしつの者と定めおわんぬ。在世を以て滅後を推すに、一切諸宗の学者等は皆外道げどのごとし。彼らが云う、一大悪人とは日蓮に當れり。一切の悪人これに集まるとは、日蓮が弟子等これなり。かの外道は先仏の説教流伝の後、これを謬あやまりて後、仏を怨となせり。今諸宗の学者等もまたまたかくのごとし。所詮、仏教に依て邪見を起す。目の転ずる者、大山転ずとおもつ。

今八宗十宗等多門の故に諍じようもん論ろんをいたす。涅槃經第十八に贖ぞく命みやうじゆう重じゆう宝ほうと申す法門あり。

天台大師の料りようけん簡けんに云く、命とは法華經なり。重宝とは涅槃經に説く所の前三教なり。ただ涅槃經に説く所の円教はいかん。この法華經に説く所の仏性ぶつじようじゆうじゆう常じゆう住じゆうを重ねてこれを説て歸本せしめ、涅槃經の円常を以て法華經に損す。涅槃經の得分はただ前三教に限る。天台の玄義の三に云く、涅槃は贖命の重宝なり。重て掌つうを抵つのみ文。籤の三に云く、今家こんけ

引く意は大經の部を指して以て重宝となす等云云。天台大師の四念処と申す文に法華經の雖示種種道の文を引て、先四味をまた重宝と定めおわんぬ。もししからは、法華經の先後の諸經は法華經のための重宝なり。

世間の学者のおもわく想おもわくに云く、これは天台一宗の義なり。諸宗にはこれを用いず等云云。

日蓮これを案じて云く、八宗十宗等、皆仏滅後よりこれを起しろんし論師・人師にんしこれを立つ。滅

後の宗を以て現在の經を計るべからず。天台の所判は一切經に叶うに依て一宗に屬してこれをすつ弁すつべからず。諸宗の学者等、自師の誤を執する故に、或は事を機に寄せ、或は前師に譲り、或は賢王を語らい、結句、最後には悪心強しうじよう盛にして鬪争を起し、失たがなき者をこれをそのつ損そのつて樂となす。

諸宗の中に真言宗殊ひがごとに僻案ひがごとを至す。善無畏ぜんむい・金剛智等こんごうちの想おもわくに云く、一念三千は天台の極理ごくり・一代の肝心かんじんなり。顯密二道の詮たるべきの心地の三千をばしばらくこれを置く。

この外、印と真言と仏教の最要等云云。その後、真言師等事をこの義に寄せ、印真言なき

經經をばこれを下す。外道の法のごとし。或義に云く、大日經は釈迦如来の外の説なりと。或義に云く、教主釈尊第一の説なりと。或義に、釈尊と現じて顯經を説き、大日と現じて密經を説くと。

道理を得ずして無尽の僻見これを起す。譬えば乳の色を弁えざる者、種々の邪推なせを作ども本色に当らざるのごとし。また象の譬のごとし。今、汝等知るべし。大日經等は法華經已前ならば華嚴經等のごとく、已後ならば涅槃經等のごとし。

また天竺の法華經には印・真言有れども、訳者これを略し羅什は妙法經と名なづけ、印・真言を加えて善無畏は大日經と名づくるか。譬えば正法華・添品法華・法華三昧・薩云分陀利等のごとし。仏の滅後、天竺においてこの詮を得たるは竜樹菩薩。漢土において始めてこれを得たるは天台智者大師なり。真言宗の善無畏等・華嚴宗の澄ちようかん觀等・三論宗の嘉祥等・法相宗の慈恩等、名は自宗に依れども、その心天台宗に落たり。その門弟等この事を知らず。いかんぞ謗法の失を免んや。

或人日蓮を難じて云く、機を知らずして麤義を立て難に値うと。

或人云く、勸持品のごときは深位の菩薩の義なり。安樂行品に違すと。

或人云く、我もこの義を存すれども言わずと云云。

或人云く、ただ教門ばかりなり。理は具に我これを存すと。

卞和は足を切らる。清丸は穢丸と云う名をたまいて死罪に及んと欲す。時の人これを咲

う。しかりといえども、その人いまだ善名を流さず。汝等が邪難もまたしかるべし。勸持

品に云く、諸の無智の人有つて悪口罵詈す等云云。日蓮この経文に当れり。汝等なんぞこ

の経文に入らざる。及加刀杖者等と云云。日蓮はこの経文を読めり。汝等なんぞこの経文

を読まざる。常在大衆中欲毀我等過等云云。向国王大臣婆羅門居士等云云。

悪口而鬻蹙数見擯出。数数とは度々なり。日蓮擯出衆度。流罪は二度なり。

法華経は三世説法の儀式なり。過去の不軽品は今の勸持品。今の勸持品は過去の不軽品

なり。今の勸持品は未来、不軽品たるべし。その時は日蓮はすなわち不軽菩薩たるべし。

一部八卷二十八品。天竺てんじくの御経は一須臾しゆゆに布くと承わる。定て数品あるべし。今、漢土日本の二十八品は略の中の要なり。正宗はこれを置く。流通に至て宝塔品の三箇の勅宣は、靈山虚空の大衆にこうむらしむ。勸持品の二万・八万・八十万億等の大菩薩の御誓言は、日蓮が浅智に及ばざれども、ただし恐怖悪世中の経文は末法の始を指すなり。

この恐怖悪世中の次下の安樂行品等に云く、於末世等おまつせとう云云。同本異訳の正法華經に云く、然後末世ねんごまつせ。また云く、然後来末世ねんごらいまつせ。添品てんぽん法華經に云く、恐怖悪世中等云云。

当時当世三類の敵てきにん人はこれあるに、ただし八十万億那由他の諸菩薩は一人も見えたまわず。乾ひたるしお潮の満ちざる、月の虧かけて満ちざるがごとし。水清まば月を浮べ、木を植えれば鳥を棲しむ。日蓮は八十万億那由他の諸の菩薩の代官としてこれを申す。かの諸の菩薩の加被うけを請るものなり。

この入道、佐渡国へ御供なすべきのよし承りこれを申す。然るべけれどもも用途と云い、かた／＼煩いあるの故にこれを還かえす。御志始てこれ申すにおよばず。人人にかくのごとく

申させたまえ。ただしらいそう僧等のみ心に懸り候。便宜びんぎの時、早々これを聴かすべし。穴賢

／＼

十月二十二日とじのとき酉時

土木殿

日蓮

花押